

教団が Ecclesia 的組織でなかったという一つの原因があるのではないだろうか。それと違った寺院の本質は何であったであろうかと考うべきである。西洋と違った日本仏教団の世界史的意味の一つをここに見てよい。故に、日本仏教団に於て見られる「サンガに帰れ」というスローガンは国際的歴史的に見て実はいくたの疑問をはらんでいる。日本仏教団は西洋及びインドと違った別の新しい方向を持っていた。又持たねばならないであろうからである。

次に、人間存在の歴史という観点から日本歴史をとらえた場合、一貫している根本原理は日本人の持つ原始民族のアルケタイプとしての Group mind と現実の問題となつて人口過剰とであり又、あつたと見られる。現代社会に今なお残る家長主義・能力の無視・個人的情実等の原始民族的悪徳はこの二つの Neigungen から出ている。この悪徳は僧俗に通ずる。このことは海外にある所謂僧或は俗なる日本人グループに於て顕著に見られる事実である。日本人同志の推薦が国外に於て必ずしも信頼をえないようになってきていることもこれに起因している。僧にも俗にも優位をおくべきではない。仏教学はヒューマニズムに根差した人間の能力主義を基調とする。

蓮師における報恩称名の教条

藤原幸章

蓮師教学の特色として常に注意せられてきた報恩称名の教示は、旧来一般に「能称の意許」（称名の称念）を示したものととして、それは特に称名の仕方に関する問題としてのみ理解せられてきた。然るに私は今これを単に口業称名の問題にのみ限定せず、広く身口意の三業を場とする信仰生活全般を包むものと考え、ここに我々の具体的な念仏生活の指標を求めたいと思う。

ところでかくの如き解釈は、蓮師の直接表現に従う限り必ずしも妥当ではないかもしれない。けれども蓮師が信の上の称名を特に報恩称名と表示せられるとき、それは「念仏の本行」を軸とした「常に彼の仏恩を念報する」信の生活そのものを包むものといえないであろうか。蓋し蓮師は信心の生活一切をあげて「御恩報尽の念仏を申す」生活として包括的に示すことによつて、真宗を民衆の中に直結せしめたものではなからうか。このことは我々の信仰生活は即ち念仏生活であり、そのまま御恩報尽の念仏を申す生活であること、更にもともと蓮師教学の表現は特に簡結平明を旨とした事実を顧るならば、自ら肯かれる所であろう。この意味において「弥陀をたのめる人は南無阿弥陀仏に身をばまろめられたることなり」とのかたちにおいて摂取不捨を体験した蓮師が、

「ここから「御膳を御覽じても」「物を一口きこしめしても」「ただ仏恩の尊きことをのみ思召し」、「万事につけてよきことを思い、つくるは御恩なり、悪しきことだに思いすてたるは御恩なり、するもとるも御恩なり」とか、「仏法の上は何事も報謝と存ずべきなり」等と、日常喫茶喫飯の一一から広く人間行為の全般をも感恩報謝の心情においてうけとられたことは、我々の特に見逃しえないところである。

かくして蓮師における報恩称名の内包は限りなき拡がりをもちつつ、正しく我々の信の生活行為一切を包むこととなる。しかもそれは特に報恩の行為であることにおいて、自ら能く為すの思いをはなれ、ただ為さしめ給う仏恩のおんばかりの力が荷われている。従ってそこには当為もなく停滞もなく、また限界もない。およそ一切の行為の中にこれほど美しく、力強い行為はないであろう。ここに私は「御報恩のために御念仏ころに入れて申して、世の中安穩なれ、仏法ひろまれと思召すべし」との宗祖の教示を改めて憶念しつつ、蓮師における報恩称名の教条の中に他力真宗の信の生活原理が平明・積極、且つ効果的に懇説せられている事実をおもいうものである。

法華経安楽行品について

松見得忍

古来より法華の四要品として方便、寿量、安楽、普門の四品をかぞえている。之は周知の如く文句記によったものである。ここでは安楽行品が要品となぜ数えられて来たのか。安楽行品の真意はどこにあるか。それ等を考えてみたい。

法華経は太子の言われる如く万善同帰、万善皆成仏、仏寿長邊を教える。然らばいかにして成仏するか。成仏の条件、成仏のためには何か。考えてみるとこの経典には所謂、「行」はないのではないか。万善成仏の語が示めすように、万善、これ成仏の因ならざるはなしと言うべきであろう。然しその万善成仏と言う中で第一の善行は何か。云く、法華経を聞くことである。即ち一偈一句をきき一念随喜せん者は成仏が決定されるのである。太子が、法師品の註釈の下で「諸の修行の中、この経を聞くに如かずとなり」と述べておられることは法師品の意義を明すと共に、法華経の修行の要点が「聞」の一字にあることを教えるのではあるまいか。つまり法華経の行は法華経を聞くことから出発するのである。然しそれは単に聞くことではない。法師品に説くように「この経典をきくことを得ることあらん者は乃ち能く菩薩の道を行ずる也」とあって菩薩道を行ずることにはかならぬ。このよう